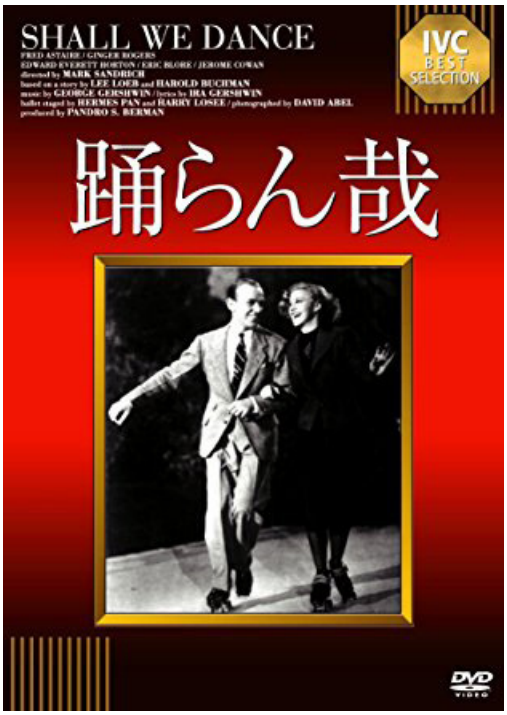
2018.6.21
vol.67

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

映画を読む

本日の上映作品『踊らん哉』



フレッド・アステア＆ジンジャー・ロジャースの洗練された史上最高のダンスを堪能できるミュージカル。偽装結婚したカップルがケンカと誤解を繰り返しながらも次第に結ばれていく様を描く。8 曲あるミュージカル・ナンバーはいずれも甲乙付け難いが、特にアカデミー賞にノミネイトされた『They Can't Take That Away From Me』とタイトルナンバーの『Shall We Dance』は中でも傑出している。

監督：マーク・サンドリッチ
音楽：ジョージ・ガーシュウィン
出演：フレッド・アステア
　　ジンジャー・ロジャース
　　エドワード・エヴェレット・ホートン
製作：1937 年　アメリカ　モノクロ　108 分

『フレッド・アステア自伝』	フレッド・アステア／著	青土社	778.04
『深読みミュージカル』　歌う家族、愛する身体	本橋 哲也／著	青土社	775.4
『知識ゼロからのミュージカル入門』	塩田 明弘／監修	幻冬舎	775.4
『プロが選んだはじめてのミュージカル映画』 萩尾瞳ベストセレクション 50	萩尾 瞳／監修	近代映画社	778.2
『ミュージカル洋画ぼくの 500 本』	双葉 十三郎／著	文藝春秋	778.2
『ハリウッド・ミュージカル映画のすべて』	スタンリー・グリーン／著	音楽之友社	778.253
『'S Wonderful』　“Musical”The Graphic Work	大山 恭彦／企画 編	開発社	778.2
『知ってるようで知らないミュージカルおもしろ雑学事典』	石原 隆司／著	ヤマハミュージックメディア	775.4
『ミュージカル史』	小山内 伸／著	中央公論新社	775.4

コラム『踊らん哉』

ガーシュウィンに乾杯！　アステア＆ロジャースに乾杯！　　K.M.

映画史上最高のダンシング・ペアとされるフレッド・アステアとジンジャー・ロジャースの、ミュージカル映画全10作中7作目の作品です。公開は81年前の1937年。今回アステアが演じるのは、アメリカ人でありながらロシア人という触れ込みで活躍するクラシック・バレエの大家ペトロフ。一方、ジンジャーが演ずるのはパリで活躍する魅惑的なアメリカ人ミュージカル・スターのリンダ。

ペトロフがリンダに一目惚れしてニューヨークまで追いかけてくるのですが、とんだゴシップが元で二人の関係は･･･という、相変わらずのくっついたり離れたりのラブ・コメディ。ですが、使用された曲はすべて、シンフォニック・ジャズ「ラプソディ・イン・ブルー」やフォーク・オペラ「ポーギーとベス」などで有名なジョージ・ガーシュウィンの作曲。作詞は彼の実兄のアイラ・ガーシュウィンです。

ガーシュウィンと言えば、クラシックの中にジャズの精神を生かそうとした音楽家。クラシック・バレエとジャズ・ダンスの融合を目指すこの作品には、まさに持って来い。ガーシュイン兄弟の素晴らしい音楽と、7度目の共演となったフレッド・アステアとジンジャー・ロジャースの磨きがかかったダンスが見事に融合し、一味違った中身の濃いミュージカルに仕上がりました。この作品の素晴しいダンスシーンに使われている主なミュージカル・ナンバーは下記の6曲です。

◆「Slap That Bass（バスを叩いて）」
開始後30分頃：豪華客船の機関室で、ペトロフが黒人たちのジャムセッションに飛び入り、ソロでタップダンスを踊りまくる。機関室のリズミカルな騒音とシルエットに見事にシンクロして躍動するアステア！

◆「 Beginner's Luck（ビギナーズ・ラック）」
開始後35分頃：犬の散歩中の船のデッキで、ペトロフが「初めての恋でこんな素敵な人と会えるなんて･･･」と歌う。聴き入るリンダの表情の演技に注目！

◆「They All Laughed（みんなが笑った）」
開始後52分頃：ブロードウェーのキャバレーにて、客席のリンダが指名されてバンドをバックに「コロンブスもエジソンも最初は皆に笑われた。 皆は私を笑うけど最後に笑うのは･･･」と歌う。ウイットに富んだ歌詞とジャズのノリのよいリズムが実に魅力的。その後にくるペトロフとリンダのダンスは、洗練されていて実に優雅！舞台のピアノの使い方も面白い！

◆「Let's Call The Whole Things Off（喧嘩はもう止そう）」
開始後70分頃：セントラル・パークのスケートリングにて、ペトロフとリンダが、「（either）イーザー、アイザー、（niether）ニーザー、ナイザー･･･」と絶妙な掛け合いで歌ったあと、ローラースケートでタップダンスをする妙技！

◆「They Can't Take That Away from Me（誰も奪えぬこの想い）」
開始後80分頃：夜霧のマンハッタン行きのフェリー船上にて、ペトロフが「歌は終わってもメロディーが漂い続ける様に、二人の恋が終わっても思い出は残る。思い出は誰も自分から奪い取ることができない」という、切ない気持ちをうたったこの歌は大ヒットしただけでなく、兄弟に唯一のアカデミー歌曲賞へのノミネートをもたらしました。このシーンでのロジャースの表情の演技も絶妙！

◆「Shall We Dance（踊らん哉）」
開始後95分頃：ペトロフの公演初日の劇場にて、「人生は短いんだ。悲しみにひたっていないで、踊ろうよ」と歌い、リンダのお面をかぶったダンサーたちと踊るペトロフ。これを観て、ペトロフのことが忘れられずに居た客席のリンダが、たまらず顔を隠して舞台に登場する。ペトロフが本物のリンダを見つけた時、二人の愛の形と、ペトロフが目指したクラシック・バレエとモダン・バレエの融合を目指す優雅この上ない踊りが実を結び、首尾よくハッピーエンド！

今後の上映のご案内（上映作品は変更になる場合があります。）

第68回	8月23日（木）	『この世界の片隅に』	① 10:30～	② 14:00～	③ 18:15～
第69回	9月20日（木）	『市民ケーン』	① 10:30～	② 14:00～	③ 18:30～
第70回	10月18日（木）	『マンハッタンの哀愁』	① 10:30～	② 14:00～	③ 18:30～
第71回	12月20日（木）	『女だけの都』	① 10:30～	② 14:00～	③ 18:30～
第72回	1月17日（木）	『私の頭の中の消しゴム』	① 10:30～	② 14:00～	③ 18:30～
第73回	2月21日（木）	『チャップリンミューチュアル社時代１』	① 10:30～	② 14:00～	③ 18:15～

5/17 『4 分間のピアニスト』の感想

・凄い映画でした。迫力もあり、ずーっと全編、緊張のし続けでした。私の人生の中の名作数点に入る程でした。心が獣のような女性を忍耐強く導いてゆく、これは素晴しい！ヘレンケラーを教導したアン・サリバンを彷彿させるほどです。最後は、感動に酔いしれました。
・音楽のことはよくわかりませんが最後の演奏は感激し、涙が出ました。女教師と主人公が対照的で当分忘れられない映画になりました。・素敵なラストシーン。彼女の〝おじぎ〟と老教師の笑顔！　才能とか音楽とかとても考えさせられる映画でした。
・壮絶な教師との関係に、過去ある事件が「4 分間のピアノ」に秘められた。感動し涙が止まらない。今まで見たこと、聞いたことのない激しさと愛情ある人間関係が、名曲が最後に聞けた、最高の映画でした。
・とてもよかったです。岡崎市でこのような催しをしていることをはじめて知りました。今後も見たいと思います。
・18:30 の回を観られてよかったです。音が少し聞きにくかったですが、この回をまたお願いします。
・昨年みた中で BEST だったので、もう一度観たかった。午後の部に、家族に来るように伝えます。
・才能によって救われると思ったのに未来がないなんて。4 分間に生きたのでしょうか。
・とても感動しました。二人の関係もすばらしいものでした。ピアノの演奏、素敵でしたね。
・恐いところもあるけど、しょうがないかもと思えて、複雑さはよく伝わってきました。
・とてもすばらしく生きる意味を考えさせられました。シューベルトをききたくなりました。
・異様な背景の中で、だんだんと過去を持つ二人の女性が心を開いていくのが救いでした。
・冒頭の鳥たちが自由に空にはばたく映像と、自由になれない主人公と対照的でした。
・少女の哀しさとやるせなさが胸をうちました。
・はずかしながら全く知らない映画でしたが、すばらしかった！！ありがとうございました。
・ラストは予想どおり。ただ回想の展開なので、喜寿を過ぎるとついてゆけない。
・本日の映画、全く理解できませんでした。
・才能を生かすことの難しさが感じられました。
・重い映画でしたが引き込まれました。とても見応えがありました。
・少しこわい場面もあったが、ぐいぐいみてしまいました。
・素晴らしい 2 時間でした。心から感動した。
・感動、カンドウ、スゴスギ、スゴスギ！よかったぁ～！
・すごくよかったです。面白かった。迫力ありました。ありがとうございました。
・今回は大変よい映画見させていただききました。
・とても良かったです。次回も期待します。
・52 年前のアメリカ映画『分かれ道』をリクエストします。明るくてラストは号泣の、少し人種差別を批判した作品です。**この作品のデータは、見つけられませんでした。**

上映作品の選出について

図書館に所蔵されている、ホールでの上映が可能な作品を選んで上映会を開催してます。上映の不可は、DVD ケースにラベルが貼られていますので、どなたでも確認することができます。また、上映が不可な作品や所蔵されていない作品からも、これはと思える作品を選んで、予算内でレンタルを利用しています。ただし、家庭用のレンタルとは違い、レンタルできる作品も限られていますので、皆様のリクエストにお応えできる範囲は限られます。

注意

上映中の携帯操作は、周りの方の迷惑になりますのでご遠慮下さい。また、観賞マナーを守り、終了後も明るくなるまで席を立たないようにお願いします。**上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。**

サロン・ド・シネマについて

6 月～ 9 月は、ホワイエが大変暑くなるため、サロンの開催をお休みさせていただいています。水分の補給等、各自でお願いいたします。

りぶらホールにはヒアリングループが設置されています。補聴器を利用されている方は、T モードに切り替えてください。

Hearing Loop

第 68 回上映会のご案内

この世界の片隅に

IN THIS CORNER OF THE WORLD

字幕上映＆「UDCast」音声対応

8 月 23 日（木）

① 10:30 ～　② 14:00 ～　③ 18:15 ～

1944 年（昭和 19 年）２月。絵を描くことが好きな 18 歳のすずは、急に縁談話が持ち上がり、あれよあれよという間に広島市から海軍の街・呉に嫁にやってくる。彼女を待っていた夫・北條周作は海軍で働く文官で、幼い頃に出会ったすずのことが忘れられずにいたという一途で優しい人だった。

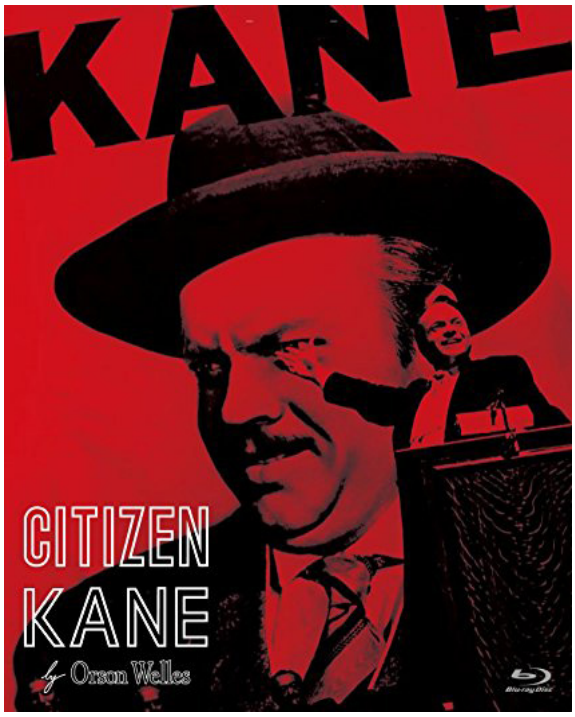
監督・脚本：片渕須直
原作：こうの史代
音楽：コトリンゴ
声の出演：のん、細谷佳正、稲葉菜月
製作：2016 年　日本　カラー　129 分

視覚障害者の方へお伝えください。『この世界の片隅に』は、字幕アプリ「UDCast」に対応しています。詳しくは「UDCast」のホームページをご覧ください。

第 69 回上映会のご案内

市民ケーン

CITIZEN KANE　　字幕上映



9 月 20 日（木）

① 10:30 ～　② 14:00 ～　③ 18:30 ～

新聞王ケーンが、“バラのつぼみ”という謎の言葉を残して死んだ。新聞記者のトンプソンは、その言葉の意味を求めて、生前のケーンを知る人物にあたるが……。様々な人物の証言から、新聞界に君臨した男の実像が浮かび上がる、斬新な構成と演出で評判を呼んだ、ウェルズ弱冠 25 歳の処女作。人生を誤った敗北者の虚しい姿が、ラストで明かされる“バラのつぼみ”の正体によって、観る者の胸をえぐるが如く、赤裸々に浮かび上がる。

監督：オーソン・ウェルズ
音楽：バーナード・ハーマン
出演：オーソン・ウェルズ、ジョセフ・コットン、ドロシー・カミンゴア、エヴェレット・スローン
製作：1941 年　アメリカ　モノクロ　119 分